

舞台 <ガルシア＝マルケスの珠玉の短編を、蜷川幸雄が演出>

『エレンディラ』

内 藤 美 奈 子

今年 80 歳になるラテンアメリカ文学の巨匠、ガルシア＝マルケスは、自分のために催された盛大なバースデー・パーティをすっぽかしたと思いきや、盟友であるキューバのカストロ首相を見舞う姿でマスコミをにぎわすなど、あいかわらず人を食った言動で健在ぶりを印象付けている。虚と実、現実と空想が渾然となった”マジック・リアリズム”と称される作風でノーベル賞を受賞したマルケスの代表作『百年の孤独』と、後に続く傑作の『族長の秋』…この二作の間に、彼は夢のように美しい短編をいくつか残している。その中でも、特にカルト的な人気を誇る小品が『エレンディラ』だ。

美少女エレンディラは早くに両親を亡くし、鬼子母神のような祖母に小間使い同然にこき使われている。ある日過失から祖母の家を全焼させた彼女を、祖母は娼婦に仕立て上げ、体を売ってその借金を返済させる。美貌の少女娼婦はまたたく間に評判となり、娼館たる砂漠のテントの前には男たちが日ごと長蛇の列をなす。ある日、彼女は美しい青年ウリセスと恋に落ちる。二人は駆け落ちをくわだてるが、祖母に先回りされ、むなしく引き裂かれる。恋の魔力で再びエレンディラを探し当てたウリセスは、祖母殺しを企てるが 毒を盛ろうが爆薬で

吹き飛ばそうが祖母は死なない。しかしある日、不吉な風が砂漠を吹き渡り……。

南米的魅力に満ちたこの作品を今夏、世界的演出家、蜷川幸雄が舞台化する。蜷川は、『ハムレット』などのシェイクスピア作品や『王女メディア』『オイディプス』などのギリシャ悲劇をスペクタクル感あふれる舞台に仕立て、海外でも高い評価を得ている。やはり世界的映画監督である北野武がこの『エレンディラ』の原作を読んで「あまりにも面白いのでぶっ倒れたね。幻想的なシーンが多くて、サルバトール・ダリやアンリ・ルソーの絵が思い浮かんだ。蜷川さんがどんな舞台を作るのだろうかとすごく興味がわいた。」と語っているが、砂漠に広がるカーニバルのパレード、巨大なダイヤモンドが埋まっているオレンジ、トラックの荷台から流れ出す夥しい羽毛、百台も続く列車、砂漠で繰り広げられるカーチェイス、翼が生えた男、恋する人間がガラスにふれると色が変わる……など原作の幻想的なイメージが蜷川の手によってどのようにビジュアル化されるのか、期待は尽きない。

白鯨のような巨大な祖母を男優が演じ、マルケスを彷彿とさせる作家を映像で渋い存在感を見せる名優、國村隼が演じる。台

本を書いた坂手洋二は、作品の背景となったコロンビアのグアヒラ地方を訪れ、原住民のワユ族に取材を試みた。道なき道を分け入ったその旅の記憶が台本のそここちに顔を見せる。

また、音楽にピーター・グリーナウェイ作品や「ピアノ・レッスン」などの映画でおなじみのマイケル・ナイマンを迎え、その歌曲を主演のミュージカルスター中川晃教が劇中で歌うのも楽しみだ。この夏、いままで見たこともない「見世物祝祭劇（スペクタクル・オペラ）」を是非楽しんでいただきたい。

(ないとう・みなこ ホリプロ)



舞台『エレンディラ』／彩の国さいたま芸術劇場・大ホール／8月9日～9月2日（大阪、名古屋でも公演あり）／お問合せ：ホリプロ 03-3490-4949
原作：ガルシア＝マルケス／演出：蜷川幸雄
音楽：マイケル・ナイマン／出演：中川晃教、美波、あがた森魚、國村隼、瑛川哲朗ほか

ラテンアメリカ参考図書案内③

『世界の食文化 ⑬ 中南米』

山本 紀夫編 (財)農山漁村文化協会 2007 年 3 月 296 頁 3,200 円＋税

ラテンアメリカは、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、ピーナッツ、トウガラシ、トマト、カボチャなどの穀類、野菜、香辛料、カカオ、パイナップル、パパイア等の果実類や嗜好品のタバコ、ココなど、実に多くの原産地であることは知られている。この広大な地域に、先住民、欧州からの征服者、植民者やアフリカから連れてこられた奴隷、東欧、中東、アジアを含む世界各地からの移民など、様々な文化が融合して多彩な食文化が展開しているのだが、日本では部分的にしか知られていない。

まずは、トウモロコシ、ジャガイモ、マニオク（マンジョカ／ユカ）という三大主食、コロンブス到達以前と以後の食文化の変化、戦前の農村部を中心にしたブラジル日系人家庭の食生活を解説しているが、大きな部分を占めるのは、17 カ国 20 地域の食文化と酒の紹介である。ラテンアメリカの主要国（ペルーやアマゾンには、さらに地域を区分している）はもとより、中米やカリブの島嶼国の知られざる食文化、醸造・蒸留以前の製法で作った酒、メキシコのテキーラや同じサトウキビを原料としながら製法に違いがあるラムとブラジルのピンガ、移住者が持ち込んだワインに至るまで、現地で長く生活した 24 人の広範な分野の人たちによる解説は、それぞれが読み物としても興味深い。 [桜井 敏浩]